2014/03/31

森里海 NEWS LETTER No. 2

CoHHO(こっほ)=Connectivity of Hills, Humans and Oceans (森里海連環)

NEWS LETTER 巻頭言

森里海 NEWS LETTER の第 2 号です。

2013 年 4 月に開講した森里海連環学教育プログラムは，6 研究科(学舎)，13 の専攻から 77 名の履修生をむかえました。夏からは多くの履修生がインターンシップや国際学会・シンポジウムに参加しました。また，必修科目の統合管理国際貢献学演習では，４つのゼミに分かれて各学生によるプレゼンテーションとゼミ参加者間のディスカッションが行われました。教育ユニットでは，フィールド科学教育研究センターと合同で国際シンポジウムや地域連携講座を開催しました。

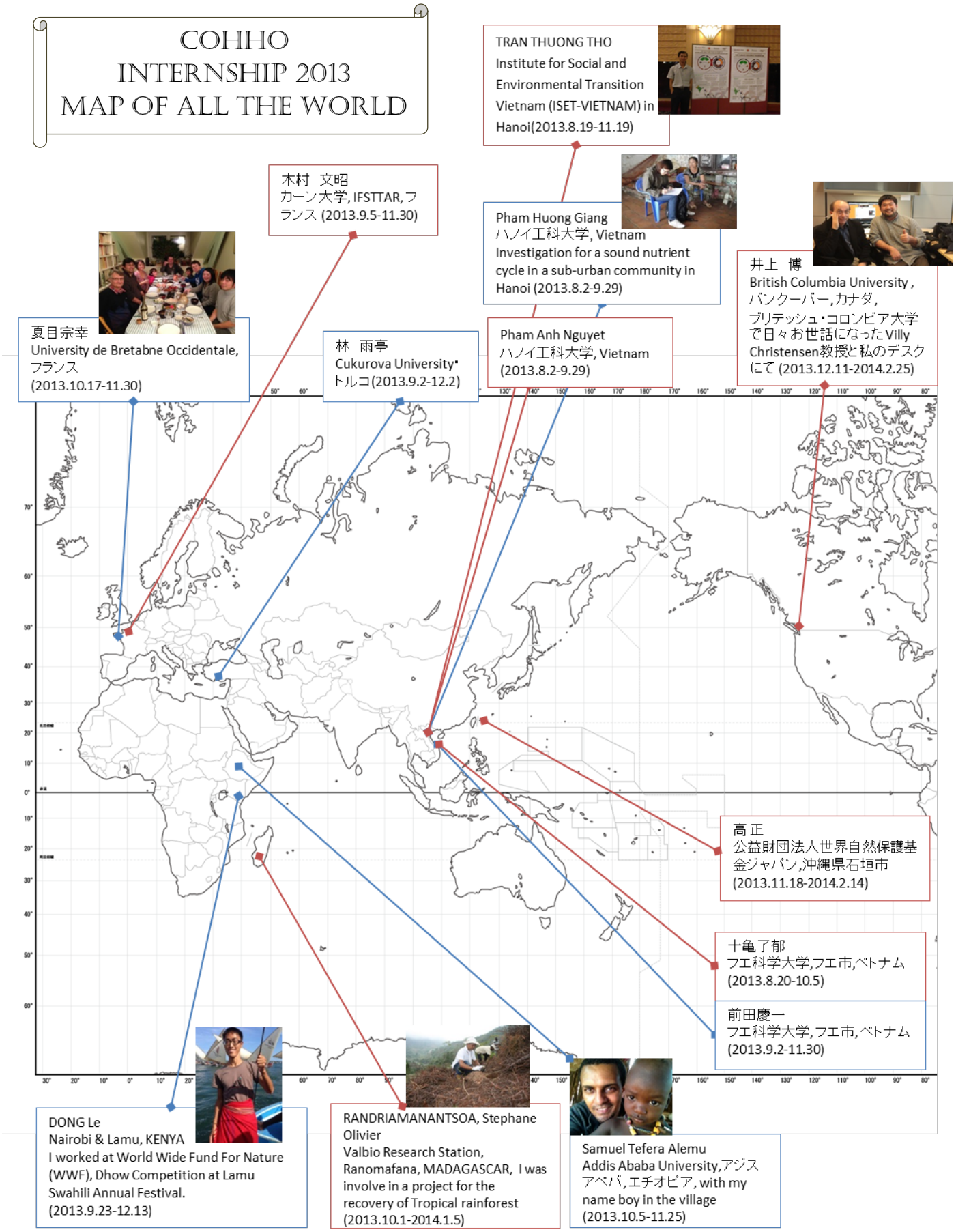
3 月には，琵琶湖畔の近江八幡市にスタディツアーに行き，プログラムとしてのフィールドワークへの取り組みも徐々に始まりつつあります。スタディツアーの翌日には，森里海連環学教育プログラムの第 1 期修了生が誕生しました。

本号では，学生たちから寄せられたレポートや写真も掲載しています。どうぞお楽しみください。

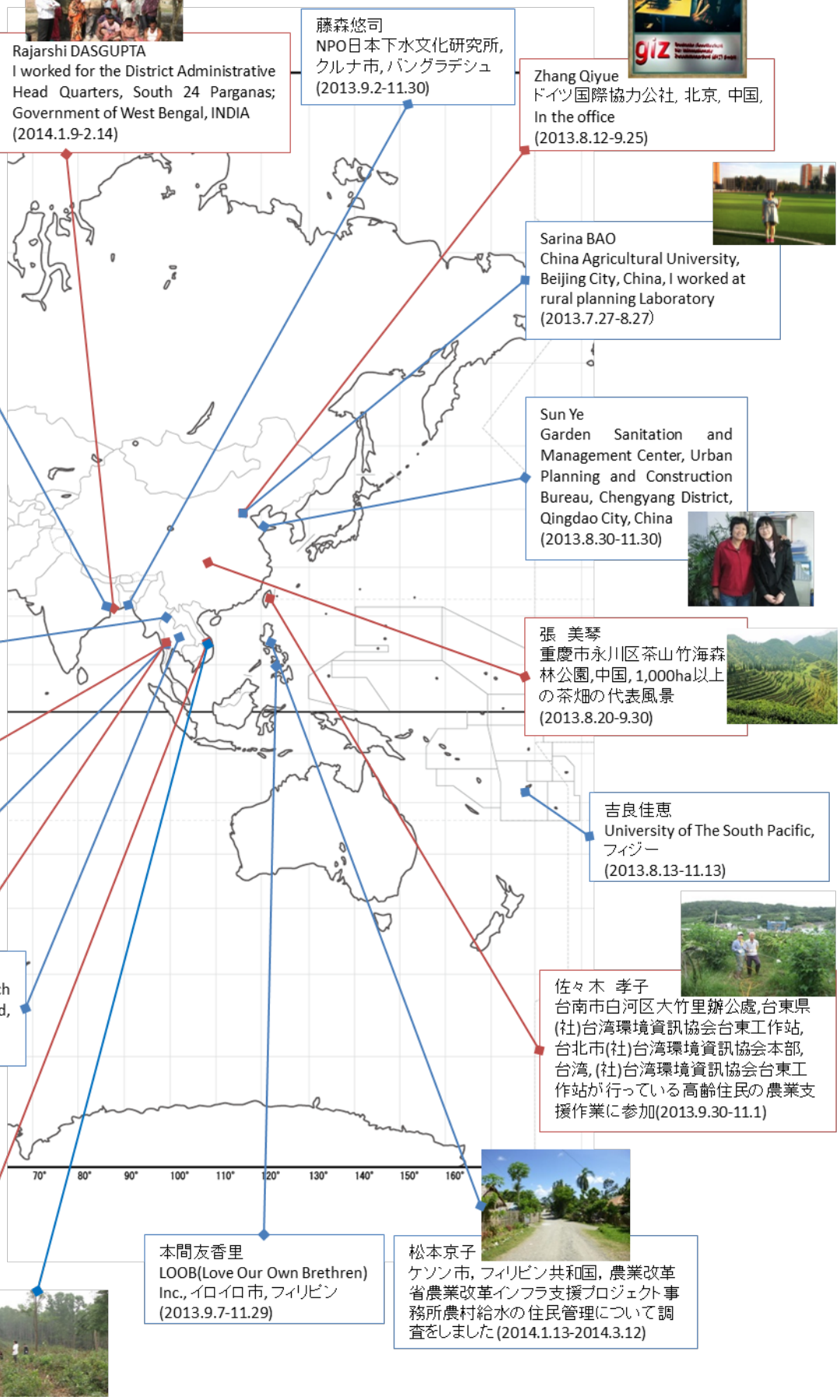
Event calendar 2013 October – 2014 March

10 月	1	後期講義開始，統合管理国際貢献学演習ガイダンス	
	31	森里海連環学公開セミナー：黄 琬惠(森里海連環学教育ユニット教務補佐員)	
11 月	10	地域連携講座(第 4 回仁淀川地域連携講座　仁淀川の“緑と清流”を再生する会 12 周年記念シンポジウム・京都大学「木文化プロジェクト」最終報告会 in 仁淀川町)：森と川とともに暮らす里の未来ー仁淀川町からの発信。『森里海連環学』のこれまで、これからー	
	26–28	森里海連環学国際シンポジウム International Symposium on the CoHHO “Integrated Ecosystem Management from Hill to Ocean”	Event report 1
		統合管理国際貢献学演習(集中講義形式)開始	
12 月	7	地域連携講座(第 5 回由良川市民講座)：森・里・海の対話～森と生きる人々へのメッセージ～	
1 月	10	2014 年度国際学会発表補助金(第 1 回)募集開始	
	27	森里海連環学公開セミナー(SEPLS Special Seminar として開催)：Anantha Kumar Duraiappah (IHDP, United Nation University)，吉岡崇仁(フィールド科学教育研究センター)，北山兼弘(農学研究科)	Event report 2
		統合管理国際貢献学演習(集中講義形式)全ゼミ終了	
2 月		後期講義終了	
3 月	23	森里海連環学スタディツアー2014 春 in 近江八幡	Event report 3
	24	第 1 回修了式，2014 年度奨学生授与式	Event report 4

31 名の履修生が森里海連環学教育プログラムのオリジナル科目「インターンシップ」を履修し，それぞれのインターン先でさまざまな知識・経験を得て来ました。



COHHO INTERNSHIP 2013 MAP OF ASIA



国際学会発表補助金を活用した国際学会での発表
(Presentations in international conference supported by CoHHO subsidy)

森里海連環学教育プログラムでは，国際的な学会・シンポジウム・会議などで研究成果を発表する履修生の参加費や旅費等の負担を軽減するため，補助金を支給しています。2013 年度は，3 名の履修生がこの補助金を受け，口頭・ポスター発表を行いました。

1. 峰尾恵人 Mineo, Keito（農学研究科修士 1 年）

student poster award を獲得しました!!

峰尾さんが参加したのは，IUFRO3.08 & 6.08 Joint Conference in Fukuoka(開催期間：2013/9/8-12)です。この国際学会は，"Future Directions of Small-scale and Community-based Forestry (小規模林業およびコミュニティを基礎とした林業の将来方向)"と題し，International Union of Forest Research Organizations：国際森林研究機関連合における 3.08 グループ(Small-scale forestry)と 6.08 グループ(Gender and forestry)の共催で開催されました。

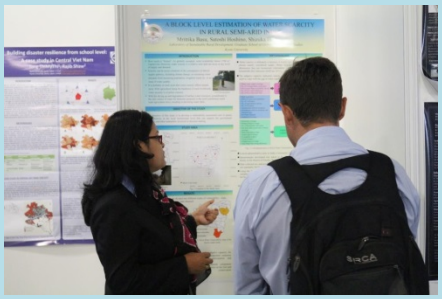
峰尾さんは，“New Challenges of Forest Management and High-Quality Timber Production by Buddhist Temples in Kyoto (京都の仏教寺院における高品質材生産と森林管理の新たな取り組み)”というタイトルでポスター発表を行い，student poster award を獲得しました。

2. ムリティカ バス Mrittika Basu（地球環境学舎博士 1 年）
3. ラジャルシ ダスグプタ Rajarshi Dasgupta（地球環境学舎博士 1 年）

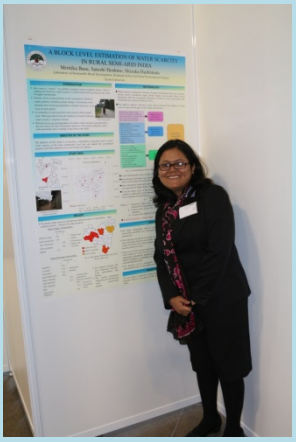
バスさんとダスグプタさんは，ドイツ・ブレーメンで開催された CLARR 2014: International Conference on Regional Climate Adaptation and Resilience (地域レベルの気候適応とレジリエンスに関する国際会議，開催期間：2014/2/24-25)に参加し，現在進めている博士論文研究の成果の一部を発表しました。この会議では，気候変動やその影響の分析と評価，これらの影響に対する脆弱性の把握，気候変動適応やレジリエンスのための解決策などについての講演・議論が行われました。

バスさんは，“A Block Level Estimation of Water Scarcity in Rural Semi-arid India (インドの半乾燥農村地域における水不足の地区別予測)”と題して，開催期間の 2 日間にわたってポスター発表を行いました。

ラジャルシさんは，“Implication of Local Knowledge in Framing Coastal Resilience Assessment Indicators :Case Study from Indian Sundarbans (沿岸域のレジリエンス評価指標の枠組みにおける地域の対応能力の関係性：インド・シュンドルボンの事例研究)”というタイトルで口頭発表を行いました。



ムリティカ バスさんのポスター発表の模様



2014 年 3 月には，国際学会発表補助金の 2014 年度募集(第 1 回)が行われ，6 名の履修生が応募しました。開始から 1 年が経過した森里海連環学教育プログラム。これからますます多くの森里海連環学に関連した研究が，世界に向けて発信されていくことでしょう。

Event report 1　森里海連環学国際シンポジウム

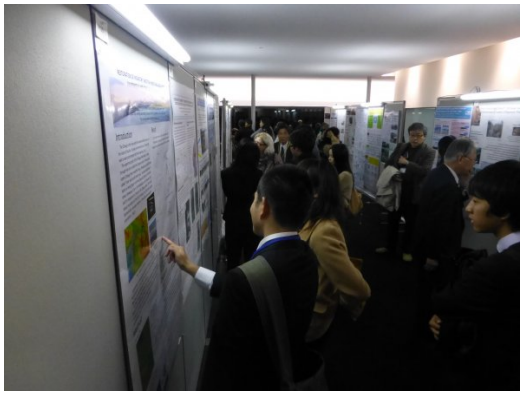
2013 年 11 月 26 日(火)～28 日(木)に，International Symposium on the CoHHO “Integrated Ecosystem Management from Hill to Ocean”を，京都大学芝蘭会館稲盛ホールで開催しました。このシンポジウムは，フィールド科学教育研究センターの設立 10 周年を記念するとともに，森里海連環学教育ユニット・プログラムの始動を国際的に知ってもらうために，開催されました。日本国内からはもちろん，韓国，ベトナム，フィリピン，バングラディッシュ，リトアニア，ウクライナ，フランス，イギリス，カナダ，アメリカ，ブラジルなど，海外 18 か国から，ご参加いただきました。参加者は，総勢 188 名でした。

11 月 26 日(火)

シンポジウム 1 日目は山下洋 森里海連環学教育ユニット長の挨拶で始まり，まずは，Session1. Connectivity between ecosystem and its disruption が行われました。ブリティッシュコロンビア大学の John S. Richardson 教授による基調講演 “Why we need to protect the forest-stream connection to ensure water security and ecosystem services” の後，8 題の口頭発表が行われました。17 時からは，稲盛ホール前ロビーでのポスターセッションに移りました。全部で 73 題のポスター発表が行われました。18 時からは，フィールド科学教育研究センター設立 10 周年の祝賀会も兼ねたバンケット(懇親会)が行われました。

左上：口頭発表セッションでは活発な質疑応答が行われました

左下：バンケットにも多くの参加者が集い，新たな出会いも生まれました



右２枚：ロビーに掲示された各発表ポスターの前では，休憩時間中やセッション終了後も多くの参加者が議論を交わしました

11 月 27 日(水)

シンポジウム 2 日目は，9 時から，Session2. Human impacts on watersheds and coastal ecosystems が始まりました。北海道大学の白岩孝行准教授による基調講演 “Giant fish-breeding forest: a new environmental system linking continental watershed with open water” の後，7 題の口頭発表が行われました。そして，昼食後のポスターセッションをはさみ，14 時からは，Session3. Solutions for functioning ecosystems: management for maintain connectivity in human landscapes に移りました。ブレスト大学の Denis Bailly 博士(森里海連環学教育プログラムの開講式で記念講義

をして下さった先生)による基調講演 “An economist perspective on blue growth and conservation in the coastal zone” の後，11 題の口頭発表が行われました。そして，19 時過ぎ，吉岡崇仁 フィールド科学教育研究センター長の総括で，幕を下ろしました。

森里海連環学国際シンポジウムでは，口頭発表とポスター発表を合わせて，2 日間で 101 題の発表が行われました。教育プログラムの履修生・スタッフもポスター発表を行いました。

- ◆ Rajarshi DasGupta and Rajib Shaw：Understanding the Key Linkages between Ecosystem Degradation and Community Resilience: A Case Study from Sundarban Mangroves
- ◆ Rina Tanaka, et al.：How Personal and Regional Characteristics Affect Place Attachment
- ◆ Sarina Bao, et al.：The Connectivity of Hills, Humans and Oceans (CoHHO): A Research on Environmental Awareness of the Residents in Beijing Suburban
- ◆ Kyoko Matsumoto, et al.：The issue of Management of Drinking Water in Communities –A Case Study in Rural Area, Andhra Pradesh, India
- ◆ Takako Sasaki, et al.：The Revived Tradition as A Settlement Management System in A Tayal’s Settlement in Taiwan: From A Viewpoint of Local Commons
- ◆ Hoang Hai Thi Nguyen：Analysis of Factors Affecting to Farmers’ Decision of Forest Stewardship Council Uptake in Vietnam
- ◆ Mrittika Basu, et al.：Water and Poverty: A Case Study from Rural India
- ◆ Kaori Anbutsu, et al. ：Standing Stocks and Productivity of Phytoplankton in the Yura River Estuary

口頭発表でもポスター発表でも，多くの分野から様々なアプローチでの研究が報告されました。また，発表者の研究フィールドも世界中に広がっており，改めて森里海連環学の幅広さを実感しました。今回のシンポジウムに多くの国々からご参加いただいたことは，森里海連環学の研究をする仲間が世界中にいること，日本だけでなく世界各地で森里海連環学が必要されていることを語っているのだと思います。

11 月 28 日(木)

最終日の 28 日(木)は，エクスカーションを行いました。海外からの参加者を中心に，約 20 名の方が参加してくださいました。この時期，京都は紅葉真っ盛り。京都大学の教授だった哲学者・西田幾多郎が思索にふけった「哲学の道」を，銀閣寺から南禅寺まで下りました。

Introduction of educational program of the CoHHO 4 統合管理国際貢献学演習 (Exercise on International Contribution to Integrated Watershed and Coastal Management)

必修科目の統合管理国際貢献学演習は，2013 年度の修了予定者を中心として後期に開講されました。本科目はグループ・ゼミ形式で，各履修生が森里海連環学教育プログラムを通して得た知識や経験，技術をまとめてプレゼンテーションを行い，質疑応答やディスカッションを通して森里海連環学を将来の国際貢献にどのように活かすかについて探求するものです。テーマの異なる 4 つのグループでそれぞれ 4 回の演習を開講しました。

1．沿岸・流域管理グループ(担当：横山・安佛)

グループ 1 では，沿岸・生態系管理および流域管理/陸水学/物質循環というキーワードを選択した受講生 10 名の参加をえて，4 回のゼミを開きました。全受講生がインターンシップを題材にしたプレゼンテーションを行いました。訪問国は，エチオピア，タイ，バングラディッシュ，フィジー，フランス，ベトナム，マダガスカルの 7 か国です。研究内容は，森林管理，水質管理，公衆衛生，土地管理，沿岸管理，底質調査のための技術開発，そして環境教育，と多岐に亘りました。最初は口数の少なかった受講生も，回数を経るごとに，英語に日本語をまじえつつも積極に発言できるようになりました。お互いの専門分野が違っても，海外での日常生活など学問的な要素に限らずに意見交換することで，各個人のインターンシップの体験を皆で共有することができたように感じます。(安佛)

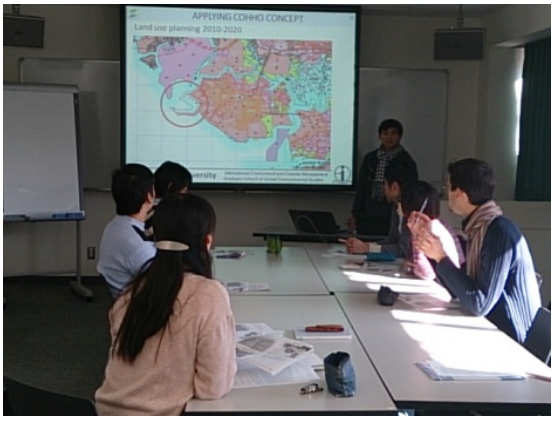
2．里の保全管理と活性化グループ(担当：清水)

グループ 2 には，農学研究科の 2 専攻，人間・環境学研究科，地球環境学舎の修士・博士課程から 9 名の学生が参加しました。森から海までの様々なフィールドでの人と自然のかかわり方ー里：人の暮らしと文化ーにおける課題や解決策について各自発表し，議論を行いました。インターンシップの報告(5 件)では中国(青島・重慶)，フランス，ベトナム，ケニアと異なる歴史文化や産業に基づく話題が挙げられ，また修士・博士論文研究やテーマに沿った事例研究の報告(4 件)がありました。他のグループの学生も自主的に参加するなど，広い分野で注目されたプレゼンテーションもありました。参加者のバックグラウンドは多様でしたが，基本的な知識・用語に対するものから，調査の具体的な方法，根本的な解決のための理念まで，質問や意見が活発に交わされ，英語での質疑応答に詰まったときには，質問の言い換えや補足など，学生同士助け合って中身の濃い議論をすることができました。演習全体を通して，学生同士，お互いの研究分野や関心事への理解を深めることができたと思います。(清水)

３．環境経営・CSR・マーケティンググループ(担当：清水・長谷川)

ビジネスと環境問題とのかかわりをテーマにしたグループ 3 には，政策，経済，経営，農村計画，建築，防災，生物化学など，さまざまな研究分野から 7 名の学生が配属されました。学生は，各自，森里海連環学教育プログラムを通して学んだ事，インターンシップを通して学んだ事，ビジネスが環境問題の解決に貢献する可能性などを，15 分程度発表しました。発表テーマは，山岳少数民族が続けている農業の持続可能性，東南アジアの新興国における廃棄物処理，東日本大震災に伴う放射能汚染，日本の過疎集落における地域づくり，東南アジアの国における気候変動に対応した土地利用計画，大気汚染が原因ともなる心臓疾患と TRP チャネルなど，非常に多岐に亘りました。7 名全員が地球環境学舎の学生であったこともあり，初回の演習から，発表後のディスカッションは打ち解けた雰囲気で，活発に意見が交わされました。

多様な研究分野の学生が集まったため，環境経営や CSR に関する認識や知識には，個人差がありました。また，英語でのディスカッションということもあり，ビジネスと環境問題とのかかわりという本グループのテーマに関して，十分に踏み込んだ議論をするのは難しい面もありました。こうした様子は，森・里・海の連環の難しさを表しているようにも思います。残念ながら，今回の演習だけでは，学生たちの認識の差を埋めることはできませんでしたが，少しでも，その助けとなり，今後の彼らの変化につながってくれたら…，と思います。(長谷川)



４．環境政策・コミュニティ開発・都市計画・国際協力グループ(担当：吉積)

グループ 4 では，農学研究科，人間・環境学研究科，地球環境学舎に所属する修士・博士院生の計 10 名(内 3 名留学生)が参加しました。参加者によるプレゼンテーションでは，日本，ベトナム，インド，インドネシア，イギリス，韓国などにおける，環境教育，環境政策，コミュニティ開発，防災，伝統的な知恵の保全，健全な都市計画，国際協力に関して，各々のインターンシップ活動や，修士/博士研究の紹介，そして森里海連環学教育プログラムで学んだことについて発表され，それぞれの発表ごとに活発な議論が行われました。ベトナムでのインターンシップの発表と，ベトナムをフィールドにした修士研究の発表の際には，ベトナムでのインターンシップの現地指導教官でもあったフエ科学大学建築学科副学科長 Nguyen Ngoc Tung 博士と地球環境学舎博士課程に在学しているベトナムからの留学生にも参加してもらい，現地の専門家による詳細な指摘も受け，内容が濃い質疑応答と議論が展開されました。

グループ 4 では博士課程の院生も多く参加しており，博士課程の院生による鋭い質問や，議論の展開，幅広い知見に，修士課程の院生にとって大変刺激になっていたようです。また留学生との英語による議論は，日本人学生にとっても国際会議の疑似体験になっていました。(吉積)

Event report 2 森里海連環学公開セミナー（SEPLS Special Seminar）

2014 年 1 月 27 日(月)に，森里海連環学公開セミナーの一つとして，SEPLS Special Seminar を開催しました。SEPLS とは，本セミナーのタイトル Toward the Sustainability of Social-Ecological Production Landscape にもある Social-Ecological Production Landscape(社会的・生態学的生産景観）のことです。京都大学農学研究科地域環境科学専攻・フィールド科学教育研究センターとの共催で開催した本セミナーでは，IHDP(International Human Dimensions Programme，地球環境変化の人間社会側面に関する国際研究計画)事務局長のアナンサ・クマール・ドゥライアパ(Anantha Kumar Duraiappah)博士を迎え，社会的・生態学的な観点から，自然環境とわたしたちの暮らしの持続可能性について意見交換会を行いました。

英語での講演・質疑応答であるにもかかわらず，用意した 50 席の会場に収まりきれないほど学内外から多くの方が参加しました。セミナー後は，講演者の先生方と CoHHO 履修生で軽食をとりながらさらに詳しいお話をすることができました。セミナーに参加した履修生からの報告をお伝えします。

セミナーレポート 1（本間友香里，地球環境学舎・地球環境政策論分野 修士 1 年）

“The New Commons: Managing the Mis-Matches” というタイトルで発表されたドゥライアパ博士のプレゼンテーションはとても興味深いものであった。その中でも二つの不適合(Mis-Matches)として挙げられていた「価値と行動」,「制度間」における不適合が，私にとって最も関心が引かれる内容であった。前者の「価値と行動」の間に起こる不適合は，価値を正しく理解しなければ間違った行動を導くことになるというものである。世の中には物事の価値や程度を図る様々な指標が存在するが，その中で最も一般的に用いられているのが「貨幣」である。ビジネスの世界でも，公共の世界でも何か新しいことを始める際にその収支がまず確認され，それに対する評価が下される。その「貨幣」が中心となった社会で貨幣換算することが難しい「生態系サービス」を対等に評価することは困難である。最近では，貨幣換算することが難しいものを CVM や WTP といった評価法を用いて貨幣換算する取り組みも行われているが，生態系サービスの実態や，人間社会がそれらから受ける恩恵を理解している人が少ない状況では，その評価方法も人々を納得させる十分な説得材料にならないと思われる。さらにドゥライアパ博士も指摘しているように個人の持つ評価基準は，価値観や信条，利害によって影響を受け易い。またそれは公共の利益を追求する行政にも言えることで，政策実施の評価基準が真の価値ではなく，利害関係の調整によって決定されることも少なくない。このように価値が正しく理解されていたとしても，それ以上に周囲の影響をより強く受けることによって間違った行動に結びついてしまうこともある。そのため人間社会を良くするという位置付けで生態系サービスの重要性を人々が認識するというだけでは不十分であり，その先にある正しい行動を導くための制度や仕組みづくりが同時に必要であると考える。

次に「制度間」における不適合であるが，これは環境における分野だけではなく全ての公共政策に共通して言えることではないかと感じた。特に日本では行政の縦割り体制が問題視されており，部門間の連携が求められている。環境問題をはじめ現代社会で問題とされている社会課題は，その要因や問題が複雑に絡み合っているため，一つの課題を断片的に取り出し対策を講じたとしても根本的な解決に繋がらないことが多い。時にはその内容が部門間で相反するものとなっている場合もある。問題の多様化や複雑化が進む現在，現状を包括的に捉えた方針を示し，それに沿った対策を個々の問題に示していくことが求められる。ドゥライアパ博士が示した二つの不適合は自然資源のマネジメント以外の分野にも言うことができそうだと感じたが，特に人によって価値観や評価が大きく異なってくる自然の生態系サービスについては，それの価値を分かりやすく示し，どれほどの価値を持っているかという理解と認識が十分される必要があると思った。

セミナーレポート２(時任 美乃理，地球環境学舎・地球益経済論分野 修士１年)

今回の森里海連環学公開セミナーが開かれたのは，ちょうど 3 ヶ月間の海外インターンシップ研修を終え，現場で得た問題点や疑問に向き合おうとしていた時期であったため，セミナーで議論された内容は，社会的，生態的，そして経済学的に自身の研究課題を捉え直すとても良い機会となった。

特に印象に残ったのは，ドゥライアパ博士による講演である。中でも彼が主張していた，コモンズの管理において生態系サービスが生み出してしまう不釣り合い(mis-matches)の指摘は，コモンズの悲劇に異論を唱えたオストロムのコモンズ論にも一石を投じており，大変興味深いものであった。自然環境とヒューマンウェルビーイングの間にある関係性に注目していた点は，自分の研究においても視野の広がる新しい考え方であった。私は現在，タイ北西部に居住する少数山岳民カレン族の農村をフィールドに，持続可能な森林保全型農村に向けた生業導入や，小農村における生業選択について，農業経済学の視点から研究をしているが，ドゥライアパ博士の示した新しいコモンズの捉え方は，山岳小農村のエコシステムとそこに暮らす農民たちのウェルビーイングをとらえるヒントになった。ドゥライアパ博士は講演の中で，幾度となくダスグプタやオストロムの考え方に触れた。コミュニティにおける合意形成のしくみをはじめ，新しいコモンズを理解するためのフレームワークに関する議論は，ダスグプタが事例としているアフリカ地域だけではなく，日本の里山を含め世界各国の地域コミュニティに言えることであり，ドゥライアパ博士が示す気付きの一つひとつが，コミュニティのしくみを考察する際には大変重要な視点だと改めて感じられた。

ボルネオ島マレーシアサバ州をフィールドとした調査に関する北山教授の講演では，持続可能な森林資源管理に関する問題点を森林伐採などの側面から理解することができた。私はタイをフィールドに研究を始める以前，同じくマレーシアサバ州にてツーリズムの研究をしていたこともあり，サバ州というフィールドの特異性や，森林保全の重要性についてあらかじめ理解があった分，森林保全システムの検討についてより興味深く感じた。サバ州は，首都クアラルンプールのあるマレー半島と違い，ボルネオ島に位置しており，生業の面でもあまり発達している地域ではない。エネルギー資源の産出地もなく製造業も未発達であるサバ州は，「マレーシアの中の発展途上地域」といえるだろう。今もなお，州の輸出総額の約 7 割がアブラヤシや木材製品であり，労働人口の半分が農林水産業に従事している。農産物を加工し生産する「アグロインダストリー」に依存してきたため，発展途上の段階から抜け出して，経済発展の次段階へと進んでいくことが困難な状況にあるのが実情だ。しかしながら一次林がまだ多く残っているのもサバ州である。北山教授のフィールド調査を基盤とした森林保全システムの研究は，まだ未開の地が多く残るサバ州という地において先鋭的な調査研究がなされており，システムへの問題定義や枠組みに関して大変参考になった。また同様に，フィールドでの調査方法をはじめ，様々な点で自身の調査にも活かしていきたい点が多く見受けられた。

今回の森里海連環学公開セミナーでは，自分自身の研究と照らし合わせながら，問題の捉え方や調査の方法について学ぶことのできる，大変実践的なセミナーであった。

Event report 3 森里海連環学スタディツアー2014 春 in 近江八幡
CoHHO Study Tour 2014 Spring in Omihachiman

2014 年 3 月 23 日(日)，森里海連環学スタディツアーを開催しました。朝はまだ寒いけれど，午後から気温が上がるという春らしく晴れわたった日，9 時に大学をバスで出発した履修生 11 名と教育ユニットスタッフは，一路，近江八幡に向かいます。

まずは，近江八幡市の旧市街地にある日牟禮八幡宮に立ち寄りました。今回は，八幡堀をゆっくり散策することはできませんでしたが，ロープウェイが設置されている八幡山を仰いだり，日牟禮八幡宮にお参りしたり。バスに再度乗り込み，時計回りに八幡山周辺を巡って，山(森)と農地(里)と琵琶湖(海)のつながりを車窓から眺めました。そして向かったのは，琵琶湖の内湖である西の湖です。西の湖では，「権座・水郷を守り育てる会」のみなさんが，舟を用意して待っていてくださいました。

日牟禮八幡宮にて記念撮影

水郷めぐり

権座上陸

2 艘の舟に分かれて乗り込み，農地とヨシに囲まれた島「権座」周辺の西の湖を回りました。舟の上から眺めると，湖と共に生きてきた地域の人々の暮らしがよくわかります。養殖の筏や広大なヨシの群落，また人工物が視界に目に入らない江戸時代のままの風景を見ることができました。舟は「権座」の船着き場に到着し，皆で「権座」上陸。舟を使わなければ農業機械も運ぶことができない権座での作業のご苦労や，ここで米づくりが続けられることによって守られてきた生態系や景観について，現在の取り組みなども交えてお話をしていただきました。

午前中の予定を終え，一行はバスで近くの北之庄地区にある「ラ・コリーナ近江八幡」へ向かいました。ここは，近江八幡創業の菓子メーカー「たねや」さんが地域の景観・文化と融合したデザイン・機能をもつ拠点施設として山野草の農園(たねや農藝)や本社施設などの建設を進めているところです。工事が進められる中，今回私たちが訪れたのは，隣接する竹林の整備と施設内の森づくりに参加させていただくためでした。作業の前に，山野草の農園の傍らで腹ごしらえをしました。まだ桜のつぼみは開いていませんでしたが，ぽかぽか陽気の中，銘々に持参した昼食を食べました。「たねや」さんから人気のお菓子を提供していただくという嬉しいサプライズプレゼントもありました。

草屋根の「たねや農藝」

お昼ご飯はピクニック

午後からは「たねや」グループ CEO の山本昌仁氏から，ミニレクチャーをいただきました。「たねや」の目指すもの，「ラ・コリーナ近江八幡プロジェクト」の展望，有機農業へのチャレンジなど，語られたことは森里海連環の実践の一つのかたちでもあると考えられます。現場での実際の取り組みの難しさや大学での研究・教育への期待を，私たちも真摯に受け止めたいと思います。

山本氏によるレクチャー

全員で記念写真撮影

記念撮影の後，私たちも実践に参加，ということで，２つのグループに分かれて竹林整備と森づくりを行いました。竹林整備は，施設敷地に隣接する八幡山の麓に広がってしまった荒れた竹林を間伐する作業です。「たねや」さんの従業員の方の指示に従い，男女問わずのこぎりや鉈を手に，協力して竹を伐り出しました。

森づくりは，数年前から八幡山で集められてきたドングリを芽吹かせ，苗に育てたものを，敷地内に植えていく作業です。一つ一つの苗が根付いて「ラ・コリーナ(イタリア語で丘)」を囲む森になってくれるよう，斜面に苦労しながら植え付けました。

伐った竹が倒れるぞ

のこぎり使いなら任せて！

苗の植え付け

このスタディツアーは，①森里海(今回は湖)の連環が存在する自然・社会環境を現場で知る，②森里海連環のもとで成立してきた社会(生活，産業，文化)や，現在進められている地域振興活動においてどのような「森里海連環学」が求められるのかを考える，③１つのフィールドで学ぶ機会を通して履修生相互の理解とつながりを深める，ことを目的として行いました。参加者は皆，楽しい一日を過ごすとともに，自分自身の興味や研究とのかかわりを考え，改めて「森里海連環学」を捉え直すことができたようです。次なるチャレンジへの意欲をかき立てる素晴らしい体験となりました。

今回訪れた近江八幡は，2014 年度の「森」の開講科目である「森里海連環の理論と実践」や，教育プログラムの必修科目「森里海国際貢献学」のいくつかのゼミの実習の舞台となる予定です。

植えた木々の生長の様子もまた見に行きたいですね

Event report 4 第 1 回修了式 Graduation Ceremony of CoHHO Program in 2013

2014 年 3 月 24 日(月)に，森里海連環学教育プログラムの第 1 回修了式が執り行われました。2013 年度プログラム修了生は 26 名，そのうち 13 名が，午前 10 時から旧演習林事務室共同会議室(開講式を行った場所と同じです)で開催された修了式に臨みました。

最初に，山下ユニット長による開会の挨拶があり，続いて，修了生ひとりひとりが修了証を授与されました。修了生は，農学研究科から 3 名，人間・環境学研究科から 3 名，地球環境学舎から 19 名，アジア・アフリカ地域研究研究科から 1 名でした。

その後，藤井地球環境学堂・学舎長，(公財)日本財団の荻上海洋安全・教育チームリーダー，宮川農学研究科長より，ご祝辞をいただきました。荻上さんは，開講式の際に尾形日本財団理事長より贈られた言葉，「チャレンジ！」を今一度メッセージとしてお話しいただきました。そして，修了生を代表して農学研究科修士課程の萱嶋 航さんが英語でスピーチを行いました。萱嶋さんは，森里海連環学教育プログラムを履修して得たこととして，英語でのコミュニケーションスキルを磨けたこと，多様な分野の学生と交流することで自分自身の研究に対するモチベーションが高まったこと，そして，他分野の学生や外国人留学生と友人になれたことの３つを挙げ，出席した修了生たちもうなずいていました。

修了証の授与

修了生代表挨拶

教育プログラム同窓会設立宣言

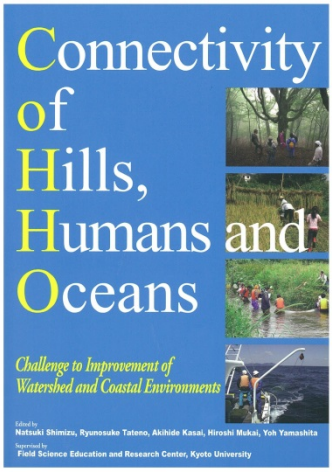
修了式の中では，2014 年度京都大学ー日本財団森里海連環学フェロー(外国人私費留学生への奨学金)の授与も行われました。中国からの留学生であるス・シンィ(Su Xinyi)さんが奨学生証書を授与されました。修了式の最後には，修了生のステファン・オリヴィエ・ランドリアマナンツァ(Stéphane Olivier Randriamanantsoa)さんが「森里海連環学教育プログラム同窓会の設立宣言」を行いました。プログラム修了後も，森里海連環学に基づく様々なチャレンジを互いに支え合っていけるように，修了生・在学生また教育ユニットが相互に情報交換や交流を図っていきたいと思います。

修了証を手に記念撮影

森里海連環学に関する英文書籍が刊行されました

森里海連環学の英文書籍 “Connectivity of Hills, Humans and Oceans: Challenge to Improvement of Watershed and Coastal Environments” が刊行されました。

これまで，森里海連環学に関する教科書としては，2007 年に刊行された『森里海連環学ー森から海までの統合的管理を目指してー(2011 年に改訂増補版発刊)』と 2012 年に刊行された『森と海をむすぶ川ー沿岸域再生のためにー』がありました(いずれも京都大学フィールド科学教育研究センター編，京都大学学術出版会)。これらに加えて，森里海連環学教育ユニットでは，森里海連環学教育プログラムのための英文教科書の作成を進めてきました。学内外から多くの方々の協力をいただき，このたび，森里海連環学では初めての全編英文の書籍を刊行することができました。



この本では，森里海連環学教育プログラムの中で講義を行う様々な分野の研究者 20 名が，森，里，川，海の生態系や人と自然のかかわり，また，森里海連環学が目指しているものについて，事例や図・写真などを多く用いて解説しています。国際社会での活躍が期待される学生のみなさんの森里海連環学の入門書であり，また海外への森里海連環学の発信のはじまりとして，多くの方に読んでいただきたいと思います。

Connectivity of Hills, Humans and Oceans
: Challenge to Improvement of Watershed and Coastal Environments

Edited by Natsuki Shimizu, Ryunosuke Tateno, Akihide Kasai, Hiroshi Mukai, Yoh Yamashita
Supervised by Field Science Education and Research Center, Kyoto University

国内価格は 3,900 円(税別)です。大学生協ショップルネ書籍コーナーの店頭にも近日中に並べられると思いますが，入手できない場合は，書店にて注文をお願いします。発行元は京都大学学術出版会です。

Informations お知らせ

●2014 年度の森里海連環学教育プログラムのガイダンスを，下記の通り行います。
日時：新規履修生向け：2014 年 4 月 9 日(水)　16：30～
　　継続履修生向け：2014 年 4 月 9 日(水)　17：30～
場所：総合研究 5 号館 2 階 202 (地球環境学舎大講義室)

●次回の森里海 NEWS LETTER の発行は，2014 年 11 月頃を予定しています。

発行　京都大学学際融合教育研究推進センター
　　森里海連環学教育ユニット
〒606-8502　京都市左京区北白川追分町
　　(京都大学フィールド科学教育研究センター内)
　　http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/

Kyoto University CoHHO Unit

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION